

-(으)ㄴ 즉

~してみると、~であるから

古文調の接続で、理由と発見の両方を表します。現代語ではほぼ使われません。

■ つけ方

語幹	形	例
パッチムなし	-ㄴ 즉	보다 → 본 즉
パッチムあり	-은 즉	듣다 → 들은 즉
名詞	인 즉	사실인 즉
発見	~してみると	본 즉 이렇하다
理由	~であるから	사실인 즉
続けて書く	즉 は語尾	본 즉 (본 즉 ×)

■ 使い方と注意

発見を表します。가서 본 즉 아무도 없었다 (行ってみると誰もいなかった)。行為の結果わかったことを述べます。

理由にもなります。사실인 즉 이렇하다 (事実はこちらである)。「~であるから」という説明の導入です。

古文調です。聖書、古典文学、格式ある文章で見かけます。現代の日常会話や新聞ではまず使いません。

現代語では -아/어 보니 (発見) や -(으)니까 (理由) に当たります。

■ 例文

- 1

사정이 그러한 즉 널리 이해해 주시기 바랍니다.
事情がそうであるので、広くご理解くださいますようお願いします。
- 2

문을 열어 본 즉 안에는 아무도 없었다.
戸を開けてみたところ、中には誰もいませんでした。
- 3

뜻이 깊은 즉 함부로 논할 일이 아니다.
意味が深いので、みだりに論じることはありません。
- 4

까닭을 물은 즉 대답이 없었다.
訳を尋ねたところ、答えがありませんでした。
- 5

손수 만든 즉 값을 매기기 어렵다.
手ずから作ったので、値をつけるのが難しいです。
- 6

근본이 바른 즉 흔들릴 까닭이 없다.
根本が正しいので、揺らぐ理由がありません。

■ 紛らわしいもの

-아/어 보니 「してみると」で現代語の発見です。ㄴ 즉 は古文調です。 보니 (現代) / 본 즉 (古文)
-(으)니까 理由を示す現代語です。ㄴ 즉 の理由用法に当たります。 사실이니 까 (現代) / 사실인 즉 (古文)
-고 보니 行為の完了後の気づきです。ㄴ 즉 と近い働きですが現代語です。 듣고 보니 (現代) / 들은 즉 (古文)

■ まちがえやすい点

- × 본 즉

○ 본 즉

語尾なので続けて書きます。
- × 사실 즉

○ 사실인 즉

名詞には 인 즉 をつけます。
- × 친구야, 본 즉 없더라.

○ 친구야, 가 보니 까 없더라.

日常会話では使いません。